都城市文化財調査報告書第20集

中大五郎第1遺跡
中大五郎第2遺跡

丸谷地区県営ほ場整備事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査概要報告

1992

宮崎県都城市教育委員会

中大五郎遺跡遠景

中大五郎第１遺跡全景

中大五郎第２遺跡全景

序

この報告書は平成３年度，丸谷地区県営ほ場整備事業実施に伴い，北諸県農林振興局の委託を受け，都城市教育委員会が実施した都城市丸谷町の中央地区に所在する埋蔵文化財包蔵地の発掘調査の記録であります。

平成３年10月から平成４年２月までの発掘調査の結果，弥生土器，住居跡や中世の遺構，遺物等が発見されました。

これらの遺物を郷土の歴史的遺産として適切な保管をはかり，本書の刊行が市史解明の貴重な資料となり，歴史教材として生かされるとともに，今後の学術研究に少しでも寄与できることを願っています。

本事業の推進と本書の刊行にあたり，発掘調査に参加された皆様，北諸県農林振興局，丸谷地区土地改良区等関係各位の御指導，御協力に対し，深甚の謝意を表しますとともに，直接発掘調査，刊行に御尽力をいただきました県文化課に厚くお礼を申しあげます。

平成４年３月

都城市教育長

隈　元　幸　美

例　　言

1．本書は，丸谷地区県営ほ場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書である。

2．発掘調査は，都城市教育委員会が主体となり，中大五郎第１遺跡を宮崎県文化課主事長友郁子，中大五郎第２遺跡を宮崎県文化課主事山田洋一郎が担当した。

3．調査は平成３年10月23日から平成４年２月２日にかけて実施した。

4．調査組織は次のとおりである。

調査主体	都城市教育委員会	
	隈元幸美	教育長
	成竹清光	文化課長
	速矢昭夫	文化課長補佐
	海田　茂	文化課文化財係長
庶務担当	田部井寿代	文化課主事
調査員	山田洋一郎	宮崎県文化課主事
	長友郁子	宮崎県文化課主事

5．本書の執筆は，第１章を都城市文化課が行い，第２章第１節を長友が，第２章第２節を山田が分担した。

6．本書の編集は長友が行った。

7．本書の方位は，全て磁北である。また，レベルは海抜絶対高である。

8．本書では，次のとおりの略記号を用いている。

ＳＡ－竪穴住居跡，ＳＢ－掘立柱建物跡，ＳＣ－土坑，ＳＬ－周溝状遺跡

目　　次

第１章　　調査に至る経緯 …… 1
第２章　　調査の記録 …… 2
　第１節　中大五郎第１遺跡の調査 …… 2
　　１．調査の概要 …… 2
　　２．遺　構 …… 2
　　３．遺　物 …… 4
　第２節　中大五郎第２遺跡の調査 …… 5
　　１．調査の概要 …… 5
　　２．遺　構 …… 5
　　３．遺　物 …… 7

挿　図　目　次

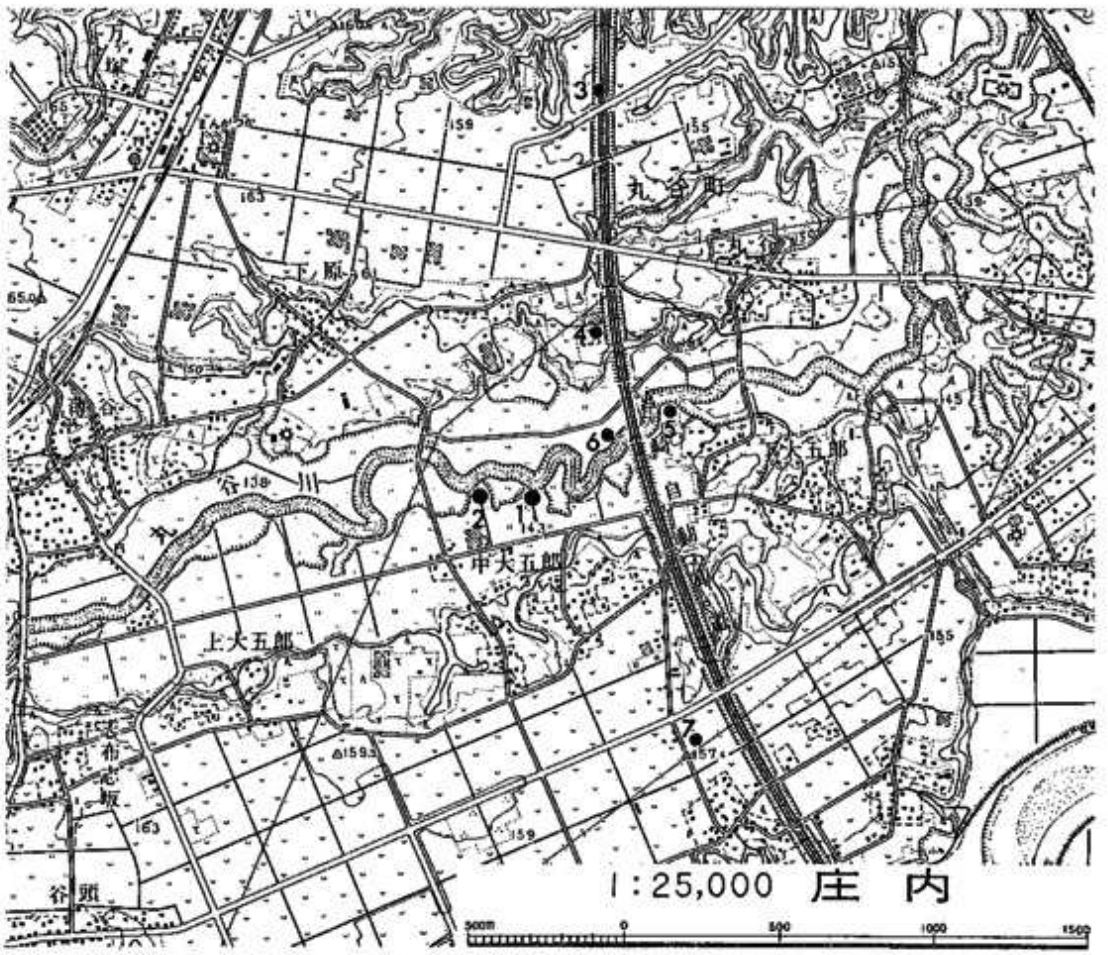
第１図　遺跡の位置と周辺遺跡 …… 1
第２図　中大五郎第１遺跡遺構実測図 …… 3
第３図　中大五郎第１遺跡遺物実測図 …… 4
第４図　中大五郎第２遺跡ＳＡ１実測図 …… 5
第５図　中大五郎第２遺跡ＳＬ１・ＳＢ３実測図 …… 6
第６図　中大五郎第２遺跡遺物実測図 …… 8

第１章　調査に至る経緯

宮崎県都城市の丸谷地区は，昭和63年度に都城市教育委員会が行った都城市北東部の遺跡詳細分布調査によって，丸谷川南岸段丘上において，下大五郎遺跡が確認されていた。

平成２年度に当該地区中大五郎の県営圃場整備事業が予定され，宮崎県文化課が平成３年３月に試掘調査を行った結果，事業区域内に遺跡の存在が判明したため，同文化課と宮崎県北諸県農林振興局との間で埋蔵文化財の保護について協議が行われた。それにより，事業施工上保存が困難な部分については，事業と並行しながら，平成３年度に記録保存の措置をとることとなった。

発掘調査は，都城市教育委員会が主体となり，平成３年10月23日から着手し，平成４年２月２日まで行った。なお現場における調査は，宮崎県文化課の長友郁子氏と山田洋一郎氏が担当した。



1．中大五郎第１遺跡　2．中大五郎第２遺跡　3．丸谷第２遺跡　4．丸谷第１遺跡
5．下大五郎遺跡　6．下川原遺跡　7．県指定志和池村古墳第13号

第１図　遺跡の位置と周辺遺跡

第２章　調査の記録

第１節　中大五郎第１遺跡の調査

１．調査の概要

中大五郎第１遺跡は，丸谷川が形成した河岸段丘の最下段に位置し，いわゆる“クロボク”土に御池ボラを疎らに含む層を包含層とする弥生時代後期を中心とした遺跡である。

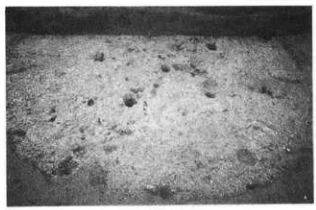
調査はグリッド法で行い，調査区の東南角を基準として10メートルグリッドを設定した。

このうち，調査区の東側半分に遺構が集中しており，遺物は調査区全体に万遍なく散布した状態であった。

２．遺構

検出された遺構は，住居跡７軒，掘立柱住居跡２軒，周溝状遺構３基，土坑３基であった。住居跡のうち間仕切りとベッド状遺構を持つものは，ＳＡ２，ＳＡ３，ＳＡ４，ＳＡ７の３軒である。ＳＡ６からは多量の炭化材が出土しているが，焼土は伴わない。周溝状遺構の島状部分に掘立柱建物が立つものはない。住居跡，周溝状遺構，土坑ともに焼土は検出されなかった。　掘立柱住居跡は，１間×２間で都城市向原遺跡で確認された弥生時代後期のものとよく似ており，周辺から出土した遺物も弥生時代後期と考えられるものばかりなので，弥生時代後期のものと考えられる。

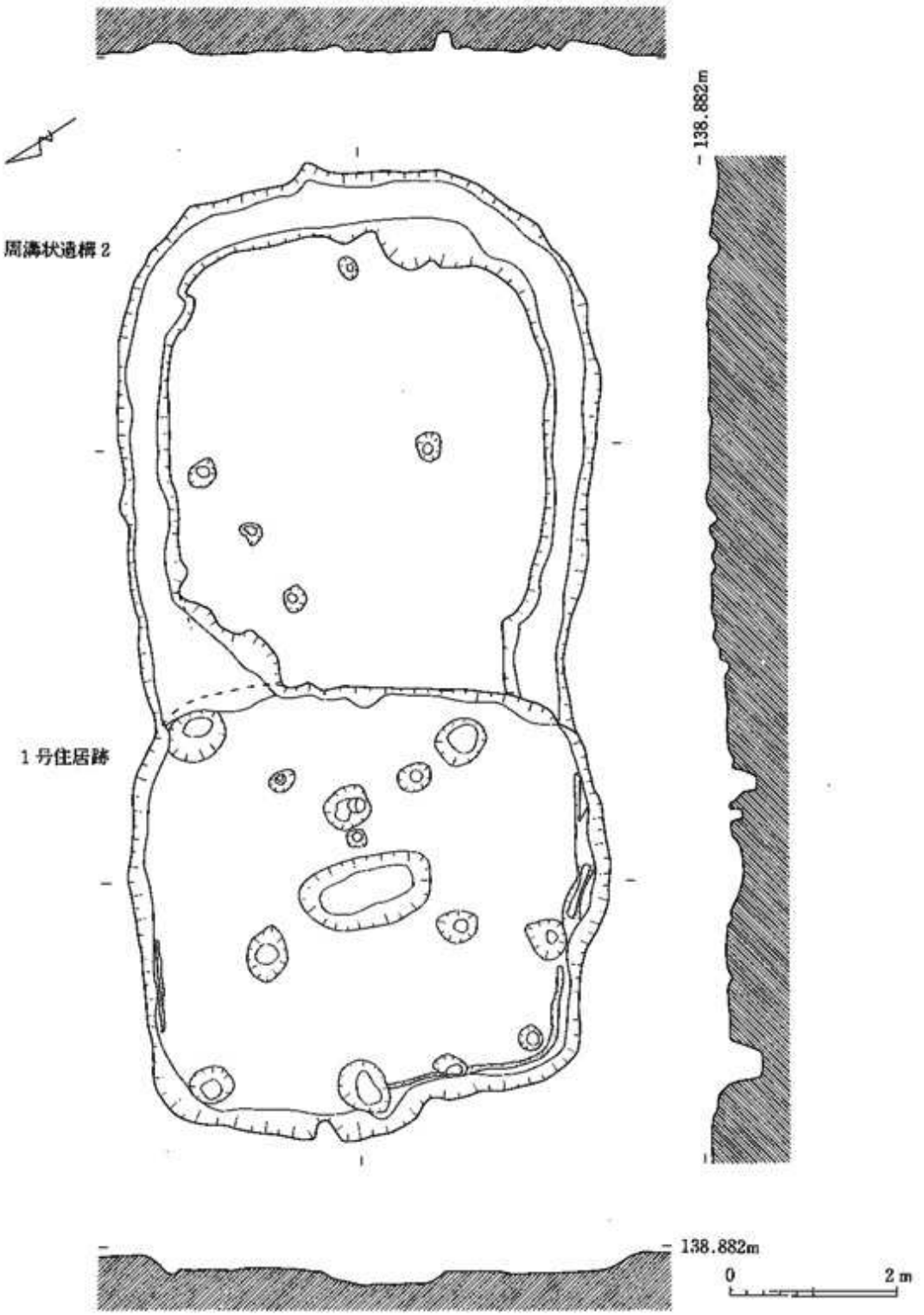
第２図の遺構実測図は，１号住居跡と周溝状遺構２である。発掘時の観察では，住居跡が周溝状遺構を切っていると判断したが，遺物の詳細な分析を行っていないので断定はできない。１号住居跡は，中央に２個の柱穴と浅いセンターピットを持ち，壁際に住居内貯蔵穴を３個持つ。また，周溝状遺構２は，長軸６メートル，短軸5.5メートルの円形に近い隅丸方形を呈し溝幅は約50センチメートルから70センチメートルで断面形は，緩やかなＵ字形を呈する。



２号住居跡

周溝状遺跡１

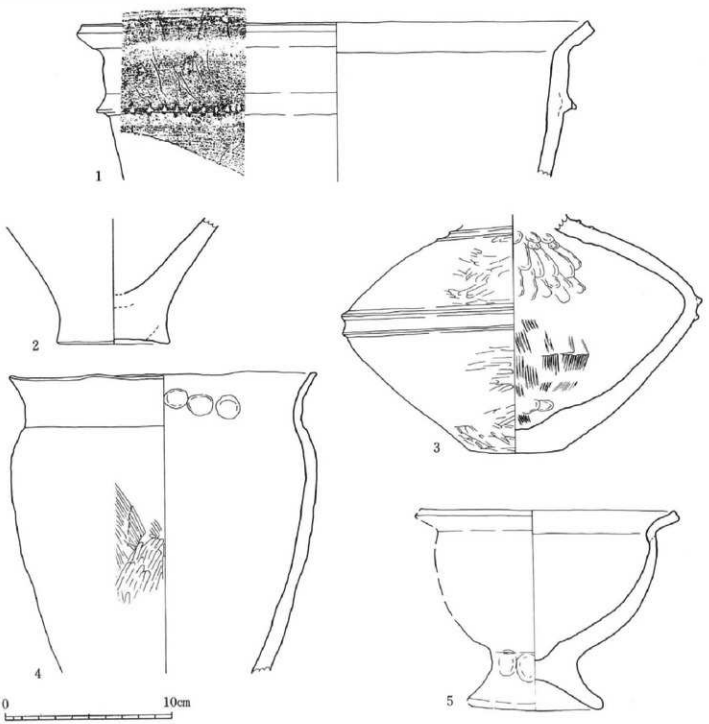
１号土坑



第2図　中大五郎第1遺跡遺構実測図

3．遺　物

第3図1・2は周溝状遺構1から，3・4は周溝状遺構4から，5は遺構外からの出土である。1は，いわゆる中溝式と呼ばれるものである。口縁部下端部になだらかな稜を持ち，口唇部がややくぼんでいる。胴部の最大径部分に刻目突帯を施す。調整は口唇部がヨコナデ，口唇部下端部から下はハケ目で，突帯部分は，ヘラ状工具による刻み目が縦方向に施されている。2は，中溝式の甕の底部で全体的に丁寧にナデ仕上げを施している。わずかに上げ底状を呈する。3は，長頸壺の胴部でそろばん玉状を呈しており，頸部に三条，胴部の最大径部に二条の突帯を有する。外面の調整はヘラミガキが主であるが突帯部分にはヨコナデを施している。内面の調整は，胴部下半部から底部にかけては縦方向のハケ目であるが，肩部は指なで，頸部は指押さえである。4は，薄手で口縁部が波うっている。5は脚付き鉢であるが，全体的にいびつである。外面・内面共に調整は，ナデであるが脚部付け根に指押え痕，内面頸部に一部ヘラケズリが残る。



第3図　中大五郎第1遺跡遺物実測図

第２節　中大五郎第２遺跡の調査

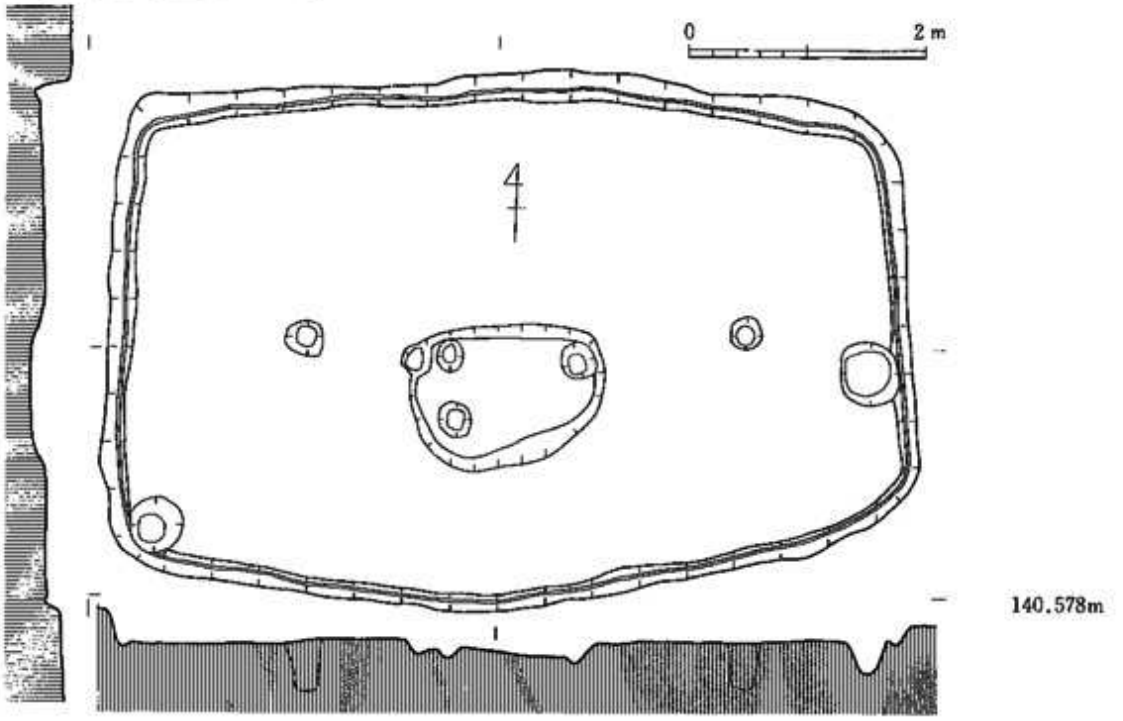
１．調査の概要

中大五郎第２遺跡は，第１遺跡の西側約50ｍの所に位置している。発掘調査面積は約6,000㎡である。調査方法はグリット法で，10ｍのメッシュに区画した。検出された遺構は，弥生時代の竪穴住居跡６軒・周溝状遺構３基・棟持ち型掘立柱建物１軒・土坑１基などである。中世の遺構は掘立柱建物９軒・土坑１基などである。また時期不明の土坑１基と溝１条も検出した。基本土層はⅠ層が耕作土で乾燥すると白っぽくなる。Ⅱ層が黒色土層で御池ボラが少量混じる。粒が細かくパサパサしている。Ⅲ層は黒褐色土層で御池ボラの含有率が高くなる。粒が多少粗くなっている。Ⅳ層は褐色土層でボラの含有率が非常に高くなっている。Ⅴ層は御池ボラ層である。

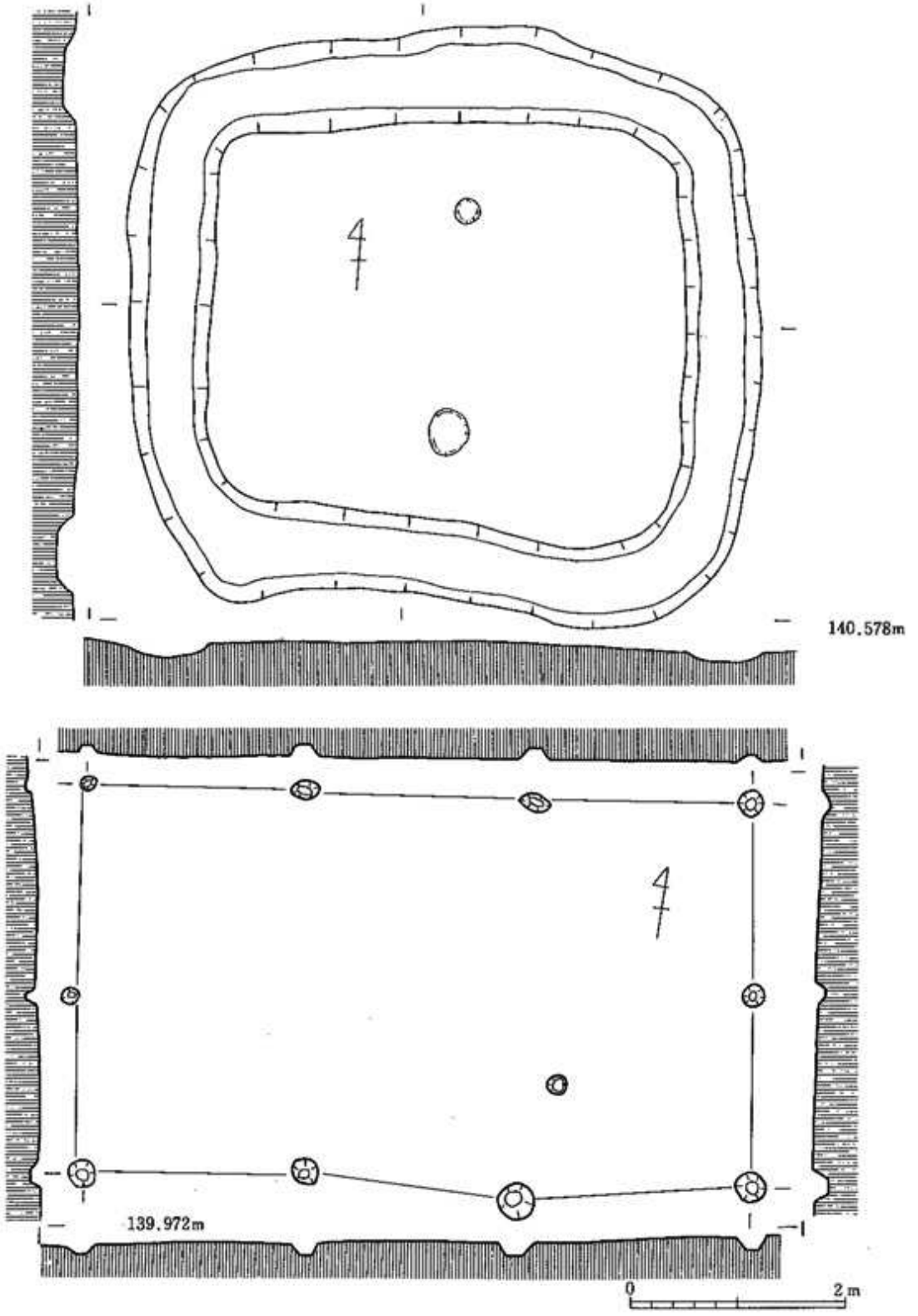
２．遺　構

弥生時代

ＳＡ１・２ともに方形プランで，主柱穴は２本柱である。ＳＡ３は円形のいわゆる花弁状住居で，主柱穴は５本と考えられる。ＳＡ４は不整形の２本柱である。ＳＡ５は方形の花弁状住居であるが，半分ほど掘削されていて柱穴は１本しか検出できなかった。ＳＡ６は方形プランで主柱穴は２本だった。ＳＬ１は長軸585㎝・短軸528㎝の方形プランで，溝に囲まれた中央部に２つの柱穴を持っている。周溝は幅が70㎝で深さが51㎝である。ＳＬ２は長軸770㎝・短軸760㎝の方形プランで周溝は幅130㎝・深さ18.9㎝である。ＳＬ３は長軸555㎝・短軸560㎝の方形プランで，周溝は幅が66㎝で深さが12.4㎝である。ＳＬ２・ＳＬ３ともに中央部に柱穴はなかった。棟持ち型掘立柱建物（ＳＢ10）の形態は桁行２間×梁行３間であった。ＳＣ２は方形プランで，長軸215㎝・短軸180㎝・深さ82㎝である。また埋土中から壺が出土している。



第４図　中大五郎第２遺跡SA１実測図



第5図　中大五郎第2遺跡ＳＬ1・ＳＢ3実測図

中世

検出された建物の形態は１間×３間が２棟（ＳＢ１・４），２間×３間が３棟（ＳＢ３・６・８）である。他に１間×４間（ＳＢ２），１間×６間（ＳＢ９），２間×４間（ＳＢ７），２間×２間（ＳＢ５）等であった。ＳＣ１は直径122cmの楕円形プランである。

その他東西方向に伸びる長さ32ｍの溝状遺構は，幅103cmで深さは15.6cmである。ＳＣ３は方形プランであった。溝状遺構・ＳＣ３ともに埋土に伴う遺物はなく時期については不明である。

３．遺物

第２遺跡の遺物出土状況は，第１遺跡が全体的に出土していたのに対し，遺構の存在する場所に遺物が集中していた。ＳＡ１の主な遺物においては４箇所に円形透かしのある器台や，住居跡内土坑出土の完形の壺・円形透かしのある高坏・口が３つある壺などが出土している。ＳＡ２では円形透かしを３つもつ器台や，完形の平底の壺・口の広い平底の壺等が出土している。ＳＡ３では胴部がはりだした平底の壺や石庖丁などの石器も出土している。ＳＡ６は頸部にヘラ削りのある甕が出土している外は，胴部片などが出土している状態であった。ＳＬ１は，遺構の南側部分に土器の集中がみられた。円形透かしの入った高坏や甕などがあり，また大きな甕の中に小さな甕が入って押しつぶれたようになっていた。ＳＬ２は遺構の東側の部分に土器が集中してみられ，二重口縁の櫛描波状文や高坏・甕などが出土している。ＳＬ３はほかの２つに比べ遺物の量は少なかった。中世の遺物としてはＳＢ９の柱穴内から青磁片が出土している。この建物の内部にＳＣ１があり，土壙の北端部に２個の土師器碗が併置されていた。

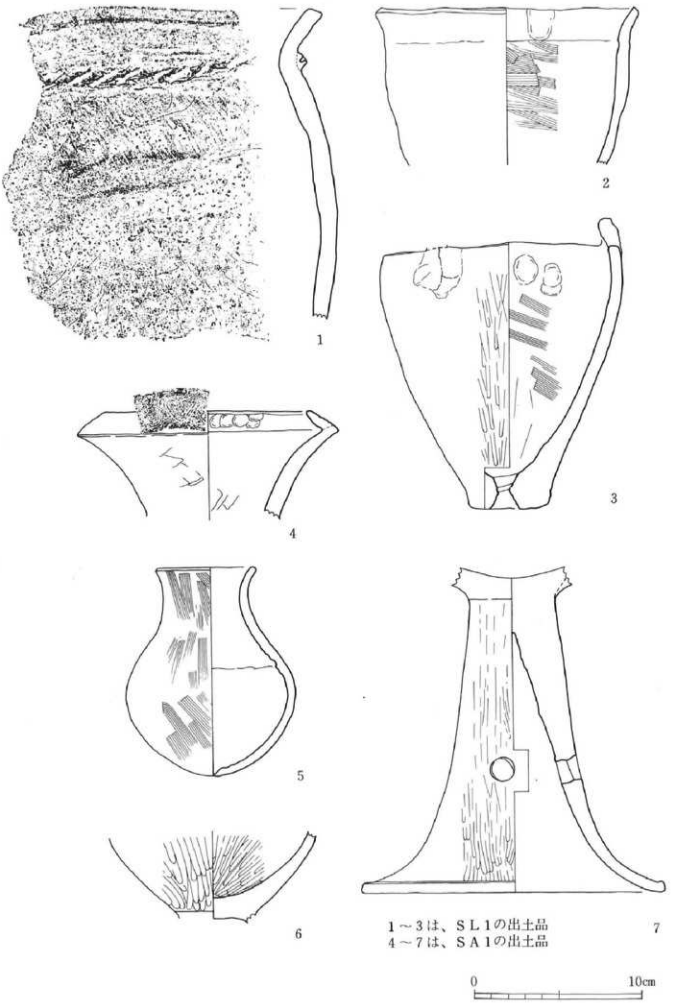
次に実測図を載せた遺物についてふれてみたい。

ＳＬ１出土の土器（第６図１～３）

１は頸部に刻目突帯をもっている甕である。器面調整は外面をナデ，内面は横ナデを施している。胴部は外面に斜め方向のハケ目を施して，その上をナデている。内面は横方向のハケ目である。２は甕の口縁部で外面にハケを横に使用してナデたと思われる痕がある。また内面をナデたあと指押さえを施している。３は甑で口縁部に貼りつけ状の突起が２個以上あると思われる。底部付近に一部指押さえがみられる。

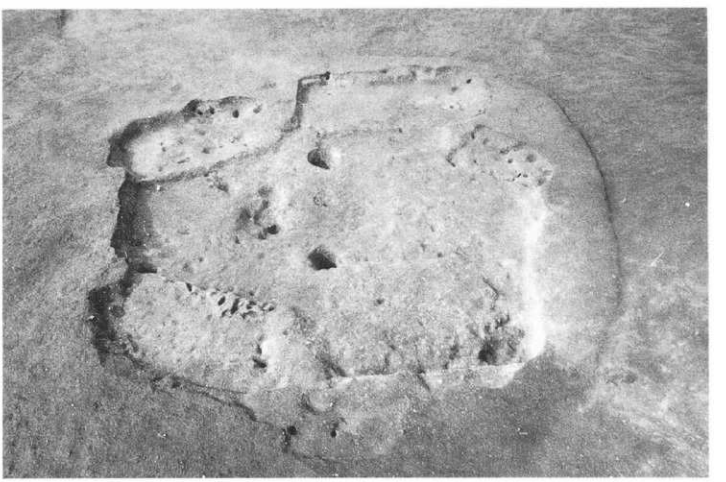
ＳＡ１出土の土器（第６図４～７）

４は，櫛描波状文の壺で二重口縁になっている。５は完形の壺で外に縦・斜め方向にハケ目を施していて，内側に指押さえの痕がある。６は壺の底部と思われ全体にミガキがある。７は高坏の脚部で４方向の透かしを持ち，外面には丁寧なヘラみがきを施している。



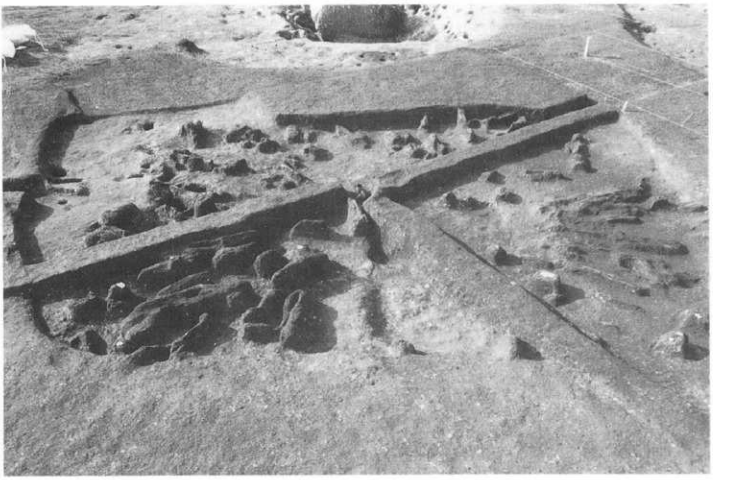
第６図　中大五郎第２遺跡遺物実測図

中大五郎第1遺跡　1号住居跡・周溝状遺構2



中大五郎第1遺跡　3号住居跡

図版 2



中大五郎第 1 遺跡　6 号住居跡炭化材出土状況

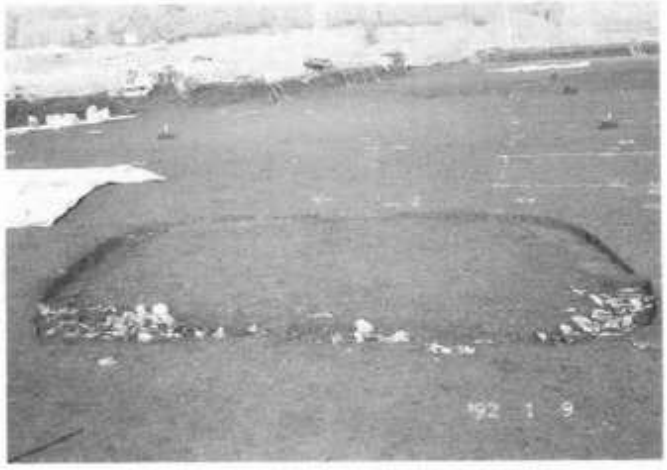
中大五郎第 1 遺跡周溝状遺構 3 遺物出土状況

中大五郎第２遺跡　遺構検出状況

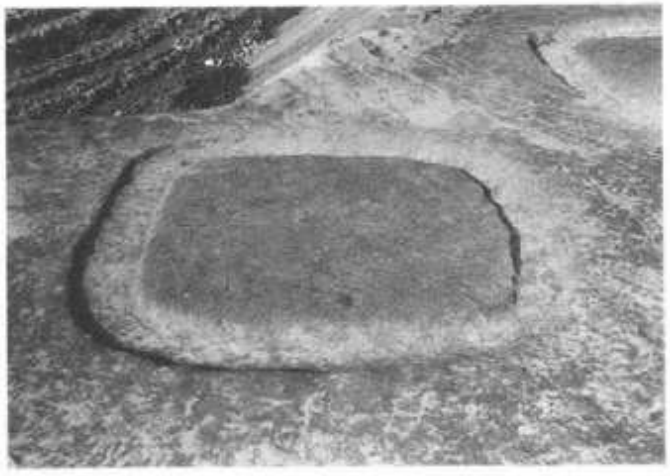
中大五郎第２遺跡　ＳＡ１完掘状況

中大五郎第２遺跡　ＳＡ３完掘状況

中大五郎第２遺跡　ＳＡ１土器出土状況

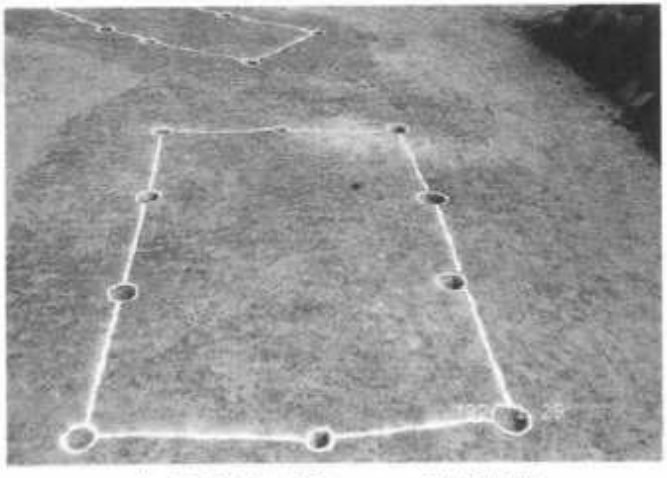


中大五郎第２遺跡　ＳＬ１検出状況



中大五郎第２遺跡　ＳＬ３完掘状況

中大五郎第２遺跡　ＳＬ１土器出土状況



中大五郎第２遺跡　ＳＢ３完掘状況

都城市文化財調査報告書第20集
中大五郎第1遺跡
中大五郎第2遺跡

平成4年3月

発　行
宮崎県都城市教育委員会
宮崎県都城市姫城町6街区21号

印　刷
㈱都　城　印　刷